



山村振興のキーポイント

「誇り」の伝承と「絆」を醸成する交流の仕組み

【昭和村から学ぶ】



サポート体制

指導者と生徒の支え合い

指導者となるからむしの生産者・織子たちが「からむし織体験生」の親代わりとなり、そしてまた「体験生」たちが高齢化の進む指導者たちの子代わりとなり、お互いに支え合うことで絆を強めている。また、この「擬似親子」をバックアップするその他の支援体制をしっかりと整えることにより、研修終了後も昭和村に定住、または帰省しても昭和村を繰り返し訪れるようになる強い関係性を構築している。

伝統と誇り

妥協しない精神が紡ぐ 昭和村ブランド

昭和村には600年もの長い間育んできたからむしの栽培の歴史と、それを継承していこうとする人々の力強い意思がある。「昭和村にしかない」という強みと、化学繊維や化学肥料、機械に頼らず、手仕事によって一つ一つ丁寧に作るという基本姿勢が素晴らしい作品を生み出し、人々の関心を集めるようになってきている。

地域資源の活用と発想の転換

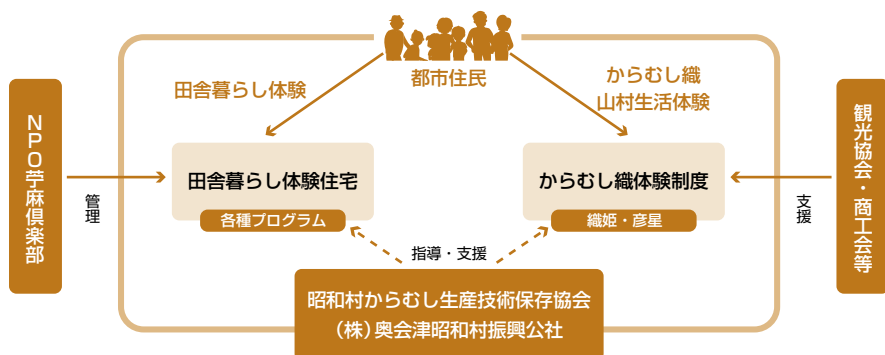
今、ここにあるものを活かす

「からむしがある」×「各家庭に織機がある」＝「村内で製品加工できる」。かつては原麻だけが現金収入の源だったが、もともと昭和村では家族の着る分は各家庭で織っていた。その加工製品を「売り物」にできるまで技術力を高めることにより、原麻だけでなく織物も収入源となり、原麻の消費地が衰退しても共倒れすることなく、自立していられるようになった。



活用した組織と制度

村が一丸となって各事業に取り組む



その人に聞く

伝統の技術を守り継承していくためには 人と人とのふれあい・交流が全ての根幹



昭和村総務課企画係 本名久喜 氏

今でこそ昭和村は「日本一のカスミソウの村」としても有名になり全国一位の生産を誇っていますが、昔はからむしが村唯一の収入源でした。

一時は危機的な状況を迎えましたが、室町時代から連綿と続く伝統を途切れさせるわけにはいきません。多くの方に御協力いただいて、技術を継承しています。

からむし織体験制度（織姫・彦星）の企画段階から指導者として携わっていただいている方には、昨年、総務大臣表彰をいただきました。80歳を超えて体力的にも大変だと思いますが、現役で頑張ってください。とてもありがたいことです。

からむしは、苗植えから刈取りできるまで3年もの月日を要します。その上、加工も一つ一つ手

仕事で行うので、簡単には生産量を増やすことができず高額となってしまいますが、雪にさらされ漂白されたからむしの美しさや、独特の肌ざわりは、けっして他の繊維には真似できません。

村の予算は限られています。いかに経費をかけず、「昭和村のからむし」を広報し、販売額を伸ばすかが今後の課題だと考えていますが、20年前に笹巻き（郷土料理）を一つあげた若者が、今ではこどもを連れて昭和村に遊びに来ます。やはりこうした人と人とのふれあい・交流が全ての根幹であり、重要なのでしょう。

村でも新規農業参入者受入事業や、若者交流事業、観光等も複合的に考え、村民の持つ技術や他の地域資源を活かし、さらなる振興をはかっています。



今後の課題・展望

「昭和村のからむし」を全国の人々に知ってもらう

目標1

からむしの 販売促進

作り手が圧倒的に少なく、非常に手間隙かかるため、高級品となってしまう、一般に受け入れられにくい。着物等の他に、より消費者の身近に感じることでできる新たな製品を企画し、販路を拡大して「昭和村のからむし」を全国的な規模で販売する。

目標2

からむしのPR

「小千谷縮」「越後上布」を知っていても、その原料となる「からむし」を知らない人は多い。限られた財政の中で効率よくPRし、誰もが「昭和村のからむし」を知っているというようになるように、知名度の向上を目指す。

目標3

からむしの 技術伝承

からむしに携わる担い手の高齢化が着実に進んでいる。今いる「高い技術力」をもった担い手たちがいる間に、早く次代に技術を継承し、そして早く技術力を向上し製品として販売できるようになるよう、積極的に「織姫制度」等を活用して人材育成を行う。

関連・関係する団体

株式会社 奥会津昭和村振興公社 〒968-0103 福島県大沼郡昭和村大字下中津川字中島611 Tel: 0241-57-2204
からむし生産技術保存協会